
今日の出会いは、明日に続く別れの始まり

ムクイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の出会いは、明日に続く別れの始まり

【Nコード】

N1583L

【作者名】

ムクイ

【あらすじ】

DTB第一期の話です。

時系列的にはノーベンバーたちが日本に上陸していて、かつ銀ちゃんの過去が発覚している辺りです。

色んなキャラが色んなところでグダグダやっている話です。

第二期がはじまる大分前に書いていたもので、設定に変更などもあります。あえてそのまま載せています。

？・ <されど紫煙は銀色に包まれて……>

この街には星が無い。

少なくとも<ホンモノの星>は見えない。

月を欠き、黒く果てしなく広がる空に光るのは偽りの星々。

それら一つひとつが個々の「契約者」を示している事実は、一般的に知られている事柄ではない。

契約者。

東京の地に何の前触れも無く突如として出現した未知の領域・「^{ヘル}地獄^{スデイト}」が生んだ産物。

人が有する当たり前の感情と特定の対価を引き換えに、人ならざる力を得た能力者たち。

その危険さゆえに彼らの存在もまた世間から隠匿されている。

しかし彼らは確かにそこにいた。

誰にも知られる事無く。

ただ合理的であるという理由で任務を遂行し続ける。

警察組織の介入も虚しく、今日もまた何処かで能力は発動し、

そして星は流れ逝く。

今日の出会いは、明日に続く別れの始まり

その男の背中からは、確かな焦りが滲み出ていた。

下町の安っぽい電燈が照らし出す金髪が映える白スーツ姿の男は、
湿気た煙草を銜えたまま乱暴な手つきでガジガジと頭を掻き毟った。
「…… まいったな」

半ば疲弊した口調でぼつりと呟くと、今度は右手で再度ポケットを
漁りはじめる。

「やはり無い、か」

分かりきっていた結果を確認しただけの行為に絶望し、男はやれや
れと澀んだ膜に覆われた空を仰いだ。

もちろんそこに在るのは仮初の星たち。その輝きは紛い物の光。

一瞬だけ全てを忘れ、男は自分の星を探していた。

契約者である自分と対を成すように存在する、星。

タールを零したような空で瞬く星の群れの中に、今も確かに自分の
星が輝いている。

少なくとも自分が生きているということがそれを証明する最も信憑
性の高い証拠だ。

「……見つかったところでどうするといふんだ？」

男はしばらくしてから視線を逸らし、自虐的な言葉を吐き捨てた。

「それよりも、今は一刻も早く煙草を探すほうが先決だろう。なあ、ジユラ」

そう言い掛けて、男は八つと振り返った。

そして呆然とそこを見る。

誰も居ない空間を。

「……何故、いないんだ」

男の声は深い闇の淵へと吸い込まれて消えた。

背後に付いていた筈の少年の姿がいつのまにか消えていた。

？・<されど紫煙は銀色に包まれて……>

「まったく、あれほどちゃんと付いて来いと言っておいたというのに……」

男のぼやきは同行者の少年に向けられたものであったが、実際には自分に対する不甲斐なさを隠すためでもあった。

「……“ M I 6 最高の契約者^{エージェント} ” が聞いて呆れる」

力ない笑みを称えつつ、男ことコードネーム<ノーベンバー11>はもう一人の仲間はどう言い訳しようか考えていた。

彼は英国秘密情報局に属す契約者。

能力は<触れた水分を氷結させる>事。変わりに支払う対価は<喫煙>。

この対価は類稀なる嫌煙家である彼にとって、想像以上に耐え難いものだった。

毎回「仕事」の後に待っているこの遣る瀬無い行為は彼にとって苦痛以外の何物でもない。

対価を支払わない契約者は、噂によればバターのように溶けてしまいうらしい。

そんなちび黒さんぼの虎みたいな話を鵜呑みにしたわけではなかったが、ノーベンバーを含む契約者は誰も自らの対価を欠かす事無く支払った。

頭の中で声がするように、体の奥から見知らぬ熱が湧き上がってくるように、彼らは対価を払わずにはいられない。

それが、彼ら契約者の在り方だから。

「と、まあそんなキザな台詞を吐いても肝心の煙草が無いんじゃ始まらない」

ジャケットポケットから取り出した空っぽの箱を逆さに振って、ノーベンバーは頂垂れる。

そこから然程離れていない場所で一仕事終えたと思ったら、たまたま煙草のストックを切らしていた。

しかも切り札として残しておいた最後の一本は芯まで湿気っていて火がつきそうにもなかった。

「だから派手にやるなと言ったんだ」

ノーベンバーはもう一人のパートナーである女性の顔を思い浮かべて苦々しげに言った。

「彼女の性格を考慮すればそれも無理な話、か」

重度の煙草嫌いである彼とは違い、対価である飲酒行為をいつもこのうえなく幸せそうに楽しむ彼女を、ノーベンバーは少しだけ羨ま

しく思った。

そして彼が契約者として危機的状況にあるというのに、自分ひとりだけ先にホテルに戻ると進言し、あまつさえビール1ダースを要求することを忘れなかった彼女を恨めしくも思っている。

「頼んでもいないのに付いてきたジュライはいなくなってしまうしな」

パートナーに取り残された彼の手を握った少年の行動を、嬉しく思わなかったわけではない。

しかし彼は所詮<ドール>だ。

ある程度の感情を残した契約者とは違い、<ドール>に与えられたのは完全なる自我の喪失。

自らの考えなどそこには存在せず、プログラムに法り日々を生きていくだけの<人形^{ドール}>。

「まあ何を思ってかは知らないが、余計な仕事ばかり増やしてくれ
る……ん？」

少年の無表情な瞳に想いを馳せていたノーベンバーの目の前に、

「ほお」

思いがけない物が飛び込んできた。

「…… 煙草屋、か」

道の終わり、曲がり角の一角に、昔ながらの寂れた煙草屋が建っていた。

英国生まれのノーベンバーですら一目で年季とレトロさを感じ取るその造り。

小さなガラスの小窓が見えるも、そこから灯りは差していない。

「もう閉店してしまったのか」

諦めと期待を交えつつ、ノーベンバーは重々しい足取りでその店へと近づいていった。

「誰もいないみたい …… って、君。いるなら返事をしたまえ」

暗い店内を覗き込むと、和室造りの部屋の中、ひっそりと物音も立てず座っている少女の姿がそこに在った。

明らかに日本人とは異なる肌と髪の色。

自分と同じ白色人種の店員に些か驚きつつも、ノーベンバーは気を取り直して声を掛けた。

「あー、その、まだ営業しているのかな？」

少女は声に出す事無く、首を縦に振った。

その控えめな肯定の仕草にノーベンバーはとりあえず安堵する。

「それは良かった。さっそくで悪いんだが、DEATH^{デス}という煙草を売ってもらいたい。イギリス製なんだが……」

そこまで言いかけたノーベンバーは、ふと何かを思い出したように少女の眼を覗き込んだ。

銀色の長髪を一つに束ねたりボンと同じ、深く柔らかな紫色の瞳。

それらが晴れた日の空を溶かし込んだような彼のそれを覗き返すことはない。

まるでガラス玉を見つめているようだと、どうしようもなく思ってしまった。

(…… 似ているな)

いつのまにかノーベンバーは、少女の面影を自分の見知った少年に重ねていた。

帽子の奥に潜んだ熱の無い瞳の色を、初めはおぞましいとすら感じた。

自分もいつかはこうなってしまうのかと諦めにも似た気持ちで眺めていたこともある。

けれど。

でも、今は—— 少し違っていた。

「ああ。すまないね」

記憶の邂逅から解き放たれたノーベンバーは、ゆるゆると頭を振り

笑顔を見せた。

「DEATHはこの国でなくともかなり希少価値の高い煙草だからね。もし無かったら——」

「350円。」

それ以下でもそれ以上でもなく。

少女は必要最低限の言葉と共に、その白い両手でカウンターに特徴的なDEATHの黒いパッケージを添えた。

「あるのか、しかし」

驚きを通り越して半ば呆れ混じりの苦笑で、ノーベンバーは財布を探った。

「えーっと。やはりここは現金のみの取り扱いなんだろうな。どれどれ……」

ごそごそと財布をいじり、見慣れない日本の硬貨を幾つか取り出して、みてはまた仕舞う。

が、

「これで足りるだろう?」

最終的に一番大きな金色の硬貨を取り出して、冷たいガラス台に置いた。

「500円だから釣りがくるだろうが、取っておいてくれたまえ。小銭がじゃらじゃら増えるのはあまり好きじゃないんだ」

煙草を懷に収めつつ、少女に向かって再度微笑みかける。

しかし少女は無言を努め、なおかつ硬貨に触れようとしなかった。

「…… やれやれ。接客業は笑顔が肝心なんだぞ」

さつきから私ばかり笑っているじゃないかと落ち込みながら、ノーベンバーは両手を挙げて肩をすくめて見せる。

やはり反応がないことを見届けると、思いついたように眼の端で捉えたあるものを指差した。

「まあつり銭の代わりといっってはなんだが、そこにある飴を戴こうか?」

少女の視線が虚空からピンクのセロファンに包まれた小さな菓子に

移される。

残念な事に少女が見せた唯一の意味ある行動を、目の前の男は見逃していた。

そしてその僅かな変化に気付く事なく無意味な会話を続けていく。

「実を言つとね、私はあまり喫煙が好きではないんだ。だってそうだろう？ 煙草にせよ酒にせよ、自らその身を滅ぼすものを体内に摂取するなんて馬鹿がやることさ。到底賢いとは言えないだろう？」
少女の視線は揺るぐ事無くピンク色に吸い寄せられている。

「煙草は特におぞましい。吸っている自分もさることながら、周囲に撒き散らす有害物の量ときたら天文学レベルだ。第一、吸った後のあの後味がいただけない」

ノーベンバーは頭を振りつつ、ゆっくりとそれに手を伸ばした。

「…… だからいつも喫煙後には何かしら口直しを用意しているんだが、あいにくそつちも切らしていてね。丁度いいところに丁度いいものがあつて本当によかつ——」

「駄目。」

触れた先にあつたのは無機質な飴の硬い感触ではなく、柔らかい<人>の温もり。

目を落とせば、少女の両手がそれを庇うように配置されていた。そして少女の視線もまた男を射抜くように注がれている。

「これは、駄目。」

少女は小さく、しかしはつきりと通る声でそう告げる。

先ほどとは打って変わったその態度にノーベンバーは僅かながらに関心を持った。

「…… 何故？」

芽生えた探究心は自然に言葉となつて彼の口からあふれ出た。

昔、ジュライ——彼の知る少年も同じようなことを言って彼を驚かせた事があった。

そのときは変わったこともあるものだと思ええしたもの、時が経つにつれてその行動は記憶の隅へと追いやられ、そして今この瞬^とき間まで忘れ去っていた。

しかし、本当はもつと興味を持つべきだったのかもしれない。

もしかすると大事な何かを、見逃してはいけないサインを読み取ることなく今まで生きていたのかもしれない。

だからこそ、彼は少女に問うた。

ちっばけな飴玉ひとつを守らなければいけない訳を——

沈黙はしばらく続いた。

考えをまとめているのか、少女はしきりに口の周りをむずむずと動かしていた。

が、それも束の間。

ノーベンバーが求めていた答えは案外あっさりとしたものだった。

「大切な人に、貰った物だから。」

真っ直ぐに落とされたその言葉。

対してノーベンバーは、

「……そうかい」

複雑な顔で笑っていた。

「何だか、長年探していた答えがやっと見つかった気がするよ」

そう言くと、彼は少女の頭をくしゃりと撫でた。

少女はわずかに口を開いただけで、特に何も言う事はなかった。

——多分、それでいい

ノーベンバーも声に出す事無く呟くと、少女にくるりと背を向けて

歩き始めた。

去りながら、少女が見えなくなる位置に来るまでその左手は別れの形に上げられたままだった。

*

「ここらへんでいいか」

適当なベンチを見つけ、ノーベンバーはそれに腰を落ち着けた。

買ったばかりの箱を開け一本の煙草を取り出し、その先端に火を点ける。

一口吸っては息を吐き、咳を交えつつまた一服する動作を数回繰り返し、穢れたものを見るように吸殻をポケット灰皿へと収めた。

そして再び空を見上げ、

「さて、—— 探しに行くとするか」

煙の代わりに言葉を吐き、瞑った目の裏側に仲間である少年の顔を思い浮かべた。

そんなしがたない男はまたしても貴重な瞬間を見逃してしまった事に気が付いてはいない。

煙草屋の少女が、

両手の人差し指を駆使して唇の端を持ち上げる

形と気持ちばかりの「笑顔」を、その背中に向けて注いでいた事を。

その小首を傾げた愛らしい姿はさながら、紫煙の向こう側に揺らめく月の光のようだった。

？・＜思い出は杯と共に消える……＞

ヘルズゲート
「地獄門」。

10年前、奇怪な光が地球を貫いた際に生まれた異常領域。

謎に満ちたその空間の深層部に辿り着いたものは誰もいない。生身の人間が踏み込んだが最後、正気を失い発狂状態となり、最終的には廃人と化してしまうというのが真偽の程は定かではない。何れせよ、人々はその未知の領域を酷く恐れた。解明できないと分かったとき彼らに出来た事といえば、嚴重な罫いでその区域を覆ってしまう事だけだった。

冷たい灰色が外部を拒絶した空間。
人を寄せ付けない絶対不可侵領域。

しかし、恐怖と畏怖を宿すその一方で、ゲートに纏わるこんな噂もある。

『ゲートの中では失ったものを取り戻す事ができる』

相応の対価を支払うことで願いが叶うといった、いわば都市伝説的な噂。

誰が最初に言い始めたのか、それを知る術は既に無い。
確かにゲート内では現実的に起こりえない事柄が日常的に頻発し、幻覚や幻聴、そして幽霊を見たなどという類の報告が後を絶えない。

有り得ないことが当たり前になる場所・「ヘルズゲート地獄門」。
願いを叶える為に支払われる対価の重さは、果たして願いの大きさと均等なのだろうか。

たとえば。

例えば――誰かが一度喪ってしまった大切な人を呼び戻したいと願った時。

その対価は人を押し潰すのだろうか？

？　　＜ 思い出は杯さかづきと共に消える…… ＞

新宿歌舞伎町の繁華街。

お世辞にも決して治安が良いとはいえない街。

夕闇を迎え入れて尚、人の流れが止まる事はない。

むしろここでは日が暮れてからが本当の夜明けといったところだろうか。

様々な色に満ち溢れ、下卑た活気に沸く街は、さながら熟しすぎた南国の果実を思わせる。

と、そこへ

「課長、だから帰りましょうって！」

人の欲望渦巻く場所におおよそ不似合いな声が響き渡った。

よく通る大きな声に、通行中のあらゆる人々が振り返って彼を見た。それに気が付いた男は慌てて声のトーンを落とし、しかし先ほどよりも真摯な様子で呼びかけている。

「別に呑むんだったらこんなところじゃなくてもいいじゃないですか！俺たちにはちよっと、ていうかかなりマズイですって！」

彼が放った“こんなところ”という単語に、明らかにカタギの雰囲気ではない男がギロリと睨みをきかせた。

ひつ、と引きつった声を出し、地味なスーツ姿の発言者は慌てて前を行く女に近寄った。

「…… まったく。見つとも無いぞ、斎藤」

後ろから逃げるようにやってきた部下を見て、外事四課課長こと霧原未咲は呆れた声を漏らした。

警視庁公安部外事四課。

そもそも外事四課とは公にはその存在すら知られていない。

「^{ヘルズゲート}地獄門」が出現した際、ほぼ同時期に観測し始められたく契約者

>という異能者たちを取り締まる為に、その部署は存在している。

課長である未咲を含め、彼らは完全なる一般人だ。

ゆえに人とはかけ離れた力を有する<契約者>たちとの攻防は常に苦戦を強いられている。

その外事四課の課長とその部下が歌舞伎町くんだりで何をしているのかというところ。

「歌舞伎町だって東京だぞ、斎藤。別に規制が敷かれているわけでも無いし、如何わしい事をしようというわけでも無い。ならいいじゃないか」

「いや、でもその、何て言いますか……」

「うるさいっ！私は今ここで呑みたいんだ！誰にも文句は言わせんぞ！」

「……」

一方的に丸め込まれた斎藤は、これ以上の説得を放棄した。

この頑固者の女課長が一度決めたら、たとえ上司の命であろうと容易く気が変わる事はない。

（…… 課長、あんまり強くないのになあ）

既にはる酔い状態であった未咲はその勢いで愛車のポルシェを転がし、それまで一緒に飲んでいた斎藤を引き連れて歌舞伎町までやってきたというわけだ。

実は斎藤の他にもう一人の同僚である河野も一緒だったのだが、勘の良い彼は未咲の誘いをのりくらりと受けかわし、少し目を放した隙に煙が如く消えていた。

つまりは結果的に上司の面倒を押し付けられたというところだろう。

「…… はあ」

自分も頃合を見計らって退散する予定だった斎藤は、情けない溜息を吐き出して雨に濡れた犬のようにとぼとぼと未咲の後を付いて歩

いた。

「どうした斉藤？元気がないぞ、そんなことではいつまでたっても契約者を捕まえることなどできんぞ！」

「……」

妙に明るい口調の未咲の背中を、斎藤は恨めしく眺めた。

しかしほおっておくとそのうちスキップでも始めかねないので、小走りで彼女の横へ並ぶ。

「で、どこで飲むんです？あまり高いところは勘弁してくださいよ、俺は課長と違ってそんなに給料良くないんですから」

「そうだなー。じゃあ、あそこにしよう」

間髪いれずに宣言した未咲の指が示す方向にあったのは、大通りから一本はずれた如何にも裏通りの的な場所にある居酒屋だった。

赤いのれんが懐かしい、昔ながらの飲み屋構え。

「……」

古きよき時代の匂いがする、とは冗談でも言えそうになかった。

「何もあんなボロ屋じゃなくても色々あるじゃないですかっ、ちよ、ちよつと課長っ！」

斎藤の制止を耳にいれることもせず、未咲はずかずかと店の中へと入っていった。

「いらっしやい」

木の板を打ち付けた名ばかりのカウンターにくたびれた面構えの店主が一人。

他の客はといえば、黒っぽいハンチングを被った小柄な中年の男がやはり一人といった有様だった。

「……ふむ」

その閑散とした店内を、未咲はぐるりと見渡した。

ものの10秒もあれば完全に見回してお釣が来そうなくらい小さな

店だった。

「ちよつと課長、人の話とか全然聞いてないでしょ……っで、うわあ」

斎藤は思わず心の声を漏らす。

（やつぱがらがらじゃねえか、おい）

失望することすら馬鹿らしくなり、かわりに美咲の耳元へそつと囁いた。

「課長、悪い事は言いませんっで。もつとまともな店がいくらでもありますよ。ここは歌舞伎町で、歌舞伎町といえば風俗店と呑み屋つすから」

「下品だぞ、斎藤」

言葉とは裏腹に満面の笑みを浮かべ、未咲はみすばらしい椅子の一つに陣取った。

「気に入った！この昭和を彷彿とさせる造りがまたたまらんっ！」

「……」

あつけに取られる斎藤を放置したまま、未咲は大声で宣言する。

「店主っ！芋焼酎をお湯割りで二杯！」

「あいよ」

同意する前から飲むものまで決められてしまった斎藤は、またもや仕方が無く未咲の隣、そしてもう一人の客とは椅子一つ分の間隔を空けて腰掛けるしかなかった。

そして三十分後。

「課長、いくらなんでもちよつと飲みすぎじゃないですか？」

「うるさいぞ斎藤っ！店主、同じものをもう一杯！こいつにも同じものだっ！」

「あいよ」

「えええっ！？」

斎藤の懇願も虚しく、未咲は既にこれだけの時間内で5杯近くも飲み干していた。

美咲ほどではないにせよ自身もそれほど酒に強くなかった斎藤は、時折押し寄せる吐き気の波と戦いながら未咲の面倒をみていた。

「勘弁して下さいよ課長……。明日も仕事なんすよ？宝来部長に怒られますよ？」

「その分の仕事をすればいいだろうがっ！酒は飲んでも呑まれるな！契約者と警察の仁義無き戦いに休みなどないのだぞっ！！！」

「いや、だからもう帰ろうって言ってるんじゃないですかあ……。最早その言動すら怪しくなってきた未咲は、言いたい事だけいってしまうと不可思議な奇声と共にカウンターに突っ伏した。

幸せそうな上司の姿を目の当たりにして斎藤は反射的にがっくりと頂垂れた。

そんなとき、

「……　ほお。お前ら警察のモンか」

ふと斎藤が顔を上げると、すぐ横で一人呑みしていた男がその視線を彼らに向けていた。

「宝来ってえのは聞いたことがある名だな。確か公安のお偉いさんがそんな名だった気がするが」

「んなっ！」

見知らぬ男が的確に言い当てた事実を前に、斎藤は思わずがたと立ち上がった。

反動で椅子が派手な音を立てて後ろ向きに倒れ、グラスを磨いていた店主が迷惑そうな顔でそれを見た。

「まあ慌てんなって」

面白いぐらい見事にうろたえる斎藤を鼻で笑いながら、男はおちょ

こを呷った。

「なあに。昔、ちよつくらお世話になったことがあつてな」

「……それって事件を起こしてつてことですか？」

「失礼な奴だなあお前さんも。俺も昔は公安のデカだったつてことだよ。ま、今じゃ想像もできねえだろうがな」

斎藤は自嘲気味に呟く男を見下ろしながら、会ったばかりの他人を“お前”よばわりするそつちの方が失礼じゃないかと心の中で毒づいた。

「つて、そうじゃなくてえええ……っ！」

「……そこまで驚くこたあねえじゃねえか」

「いや、あの、意外だったもんでつい」

「正直な奴だな、ったく」

今度は自嘲ではなく面白おかしそくに笑うと、男はおちよこを上げて店主に合図する。

常連なのか、男が何も言わずとも酒が目の前に注がれた。

「うゝん、うるさいぞ斎藤……。頭が痛くなるじゃないか」

「それって絶対俺のせいだけじゃありませんって」

苦しそくに頭を持ち上げる未咲に断言すると、斎藤は倒した椅子を元に戻して再びそこに腰掛けた。

しかし今度は酔っ払い気味の上司より、元公安警察を名乗る男の方へ多少体を寄せてはいたが。

「えっと、その」

「名前なんかどうでもいいだろ？おっさん、とでも呼んでくれ」

「あ、はい。じゃあ、その、おじさんは本当に公安に居たんですか？」

「疑り深けえな。昔の話だ、懐かしくはねえけどよ」

「はあ……」

いまひとつ納得しきれないといった表情の斎藤に、

「まだ信用してねえのか。じゃあ昔の小話でもしてやろうか？」

そう言つて、男はいたずらに目を細めた。

「俺が辞めるちよつと前の話だな。公安内部では不思議な噂が流れてた。そう、外事に新しく“四課”ができるつてえ噂だ。それも担当すんのは“契約者”とかなんとかいう超能力者だつていう話だった」

薄く笑いながら、男はおちよこを振った。

「……っ！」

斎藤はあまりの衝撃に、思わず逆流してきそうになった胃の中身を押し戻す事に必死だった。

ゆえに男が自分の様子をそつと盗み見ていたことなど、到底気付くはずもなかった。

「まあ所詮は噂話だ。だが、これで少しは信用する気になつただろ？」

「……はい。そりゃあもう」

まさか自分と隣で寝息を立て始めた上司が件の外事四課に属しているなんて、口が裂けても言えない斎藤であつた。

「ところでお前さんはどこの課だ？」

「っ！いや、えつとあの」

追い討ちをかけるような男の質問に斎藤は目に見えて怪しい動きを取り始める。

その額にはうつすらと汗も滲んでいた。

「冗談だよ」

そんな斎藤を見て、男はけらけらと肩を揺らした。

「今更退職しちまつた身の俺にはあんたがどこに属していようが関係ねえよ。むしろ興味もねえ」

「は、はあ……」

「ところでその嬢ちゃんは大丈夫か？」

内心ほつと胸を撫で下ろしていた斎藤に向かって、男はすやすやと寝息を立てている未咲を顎でしゃくつた。

「世話のかかる部下がいるとお互い大変だな」

「いや、実は上司なんですけど……って、“お互い”？」

「まあ細けえことは気にすんな。それより、上司ってのはまたさらに大変な話だな」

「はあ……。もういつも振り回されっぱなしですよ」

思い立ったが早いですがすぐ行動に移す未咲を追いかけるのは、並大抵の努力では難しかった。

それでも彼女についてここまでやってきたのは、やはり自分の信じた正義を貫き通す彼女に強い尊敬の念と憧れを抱いていたからだろう。

さらにもう一つ、斎藤は霧原未咲という人物に人として、そして一人の女性として――

「惚れてんのか？」

「ええまあ……って、ちょっとあんなっ！」

思わず答えてしまった斎藤は、顔を真っ赤にして抗議した。

しかし男はけつくと笑ってそれを受け流す。

「何でえ。お前さんが喋ったんじゃねえか。人のせいにすんな」

「そ、それにしたってさっきのは誘導尋問ですよっ！ 抗い難い、不可抗力ですって！」

「ま、それも公安の時の悪い癖ってな」

さらりと言つてのけた男に、斎藤は諦めたように苦笑した。

「まったく敵いませんね。やはり年の功ってやつですか？」

「まあ一概にそうとも言えねえよ。若いからできることつつうのも多いからな」

軽い口調とは裏腹に男の顔がわずかに翳った。

「若かろうが年とつてようが、好きな女一人守れない奴あ、人としておしまいだ……」

「……えっと、おじさん？」

突然呟かれた意味深な発言に、斎藤は思わず男の顔を覗きこんだ。
が。
それも束の間。

「う、……っ」

斎藤の顔が見る見るうちに青ざめ、頬が種を蓄えたハムスターのように膨らんでいく。

そして、

「っ……!!」

感極まったかのように突如立ち上がると、両手で口元を押さえたまま、脱兎の如く店の外へと飛び出した。

「……そういうところが若いってんだよ、ったく」

何かが盛大に逆流して放出される音を聞きながら、男は最後の一滴まで飲み干した。

「う……ん。斎藤、今何時だ？」

ふと見ると、先ほどまですやすやと惰眠を貪っていた未咲がゆっくりと起き上がっているところだった。

その顔からは眼鏡がだらしなくずり下がり、いつもはきちんと一つに束ねられている髪は乱れ、高級そうなスーツには無数の皺がよっていた。

「あのにいちちゃんなら取り込み中だ。もうすぐ帰ってくるだろうよ」

「……トイレ？」

「まあそんなもんだってことにしておいてやる。奴の名誉の為にもな」

「……？」

寝惚けているからなのか、未咲は自分がまったく見知らぬ赤の他人と普通に会話を交わしている事実にはさほど抵抗もない様子だった。

しきりに首を回し、肩をポキポキと鳴らしている。

斎藤の苦労を思うと男は笑いを押し殺すことができなかった。

「あいつも大変だな。まあ惚れた者の弱みってところ、か」

「何か言いましたか？」

「いいや。別に」

そう短く言い残すと、男はカウンターに代金を置き、ゆつくりと立ち上がった。

「まああれだ。お前さんもあいつにや優しくしてやれよ？」

のれんをくぐる一歩手前で、男は未咲にそう呟いた。

「斎藤のことですか？」

「それがあいつの名前か……。まあ何せよ、あいつはいい奴だ。大事にしてやる価値がある」

しばしキョトンと虚空を見ていた美咲だったが、しかし次の瞬間まるで酔っているとは思えない口調と顔つきで男に向き直ると、

「…… そんなこと、」

「そんなこと —— ちゃんと分かっている」

しっかりとそう言い放った。

「…… そりゃあ良かった」

喉の奥で低く笑うと、

「じゃあ、親父さんによろしくな」

男はのれんの向こう側にある華やかな世界へと消えていった。

その後姿を店主の挨拶が追いかける。

「……？」

改めて正氣に戻った未咲は、最後に告げられた言葉を眉根に皺をよせつつ考えていた。

すると、入れ替わりになるように

「うつ……。やっぱり飲み過ぎたあ」

情けない泣き声と共に斎藤が店の中へと戻ってきた。

「斎藤。お前、どこへ行っていた？」

「はい……。ちよつと野暮用で、つてあのおじさんは？」

怪訝な顔の未咲に律儀な様子で答えつつ、斎藤は店内に目をやった。

「なーんだ。もう帰っちゃったんですか。ちよつと水臭いなあ」

「知り合いか？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

「じゃあ一体何なんだ？」

「そうですねえ……」

仕事のときと同様に厳しくなる未咲の口調に対し、斎藤はぼんやりと宙を仰いだ。

「そうですね、しいていえば—— 人生の先輩、ですかね」

少しキザな言い回しで笑顔を浮かべた斎藤を、

「何だそれ。」

未咲は呆れた顔で一蹴した。

「……」

斎藤の恋は前途多難である。

「…… まったく。酔えねえ体質ってえのも困ったもんだよなあ、しかし」

冬の寒空の下、男はロングコートの前をしっかりと留めた。そしてハンチングを目深く被ると、ふとした思い付きである場所へと足を向け始める。

「どうせあいつだって暇してるんだろうよ。たまには俺も労ってもらわねえと、なあ」

そうニヤリと呟いた男は、ポケットに両手を突っ込み鼻歌交じりに歩き始めた。

途中で酒を買っていこうと心に留めながら。

「……」

ふと甦った情景にその足取りが止まる。

臉の奥に映った誰かの影は、雑踏の喧騒で掻き消した。

忘れようと思っても忘れられない思い出は酒の肴にすら成りはしない。

？・＜微笑みは手にすること無き微熱……・＞

契約者。

人知れず闇を生きる者たちに与えられた名称。

その呼び名の通り、彼らは謎の存在と契約を交わし様々な能力を手に入れた。

一体誰と、どのような契約を結んだのかは、契約した本人ですらはつきりと説明することすら叶わない。

常識として認知できる範疇を超越した彼らは、まさに新たな人の形といっても過言では無いだろう。

しかし契約者が世間から認められることはまず有り得ない。

契約者はほぼ誰もが例外なくどこかの組織に身を置いている。

自分と異なった能力を有する契約者たちを人々は執拗に恐れたからだ。

そして一丸となって牙を剥いた大衆から彼らが逃れるには、何か巨大な後ろ盾が必要だったのだ。

組織の庇護を受けるために契約者は自身の能力を行使する。

必要とあれば人を殺める事でさえ躊躇いを覚える事は無い。

何故ならそれが彼らにとって＜最も合理的＞な生き方だからである。

契約者は総じて＜合理的＞さを求める。

もしかすると、それは徐々に感情を失い行く彼らにとって、唯一残された指針のようなものなのかもしれない。

感情の喪失は

道徳的観念を剥ぎ取り、

宗教的信仰を無に化し、

個人に与えられた記憶、すなわち思い出さえも湾曲してしまう。

契約者は夢を見ない。

それは合理的な選択肢しか持ち合わせず、感情を有していない彼らにとって何の意味もないからだ。

そして、

契約者は—— 微笑わない。

偽りの夜空が彼らから奪ったのは決して上辺だけのものではない。もっとなんと大切な“何か”を失ったまま彼らは今を生きている。

果たしてそれらは未来永劫失くしたままのか、

それとも——

？　＜微笑みは手にする事無き微熱……＞

とある都内の大型スーパーマーケット。

閉店間際の時間帯にも関わらず、なかなかの賑わいを見せていた。そのほとんどが値切り品を求めてやってきた独り身の男女であったが、中には子供連れの家族やパート帰りの主婦などの姿もあった。あと30分で閉店という事もあってかスーパーの職員達の間にもどこか気だるい空気が立ち込めている。

そんな独特の雰囲気がちこめる場所に、また新たに一人の男が足を踏み入れた。

「うつわぁ。結構混んでんなあ〜」

自動ドアのシュツという音と共に現れたのは、茶髪の若い男。

身なりに若干の軽薄さを感じ取れたものの、その整った顔立ちが嫌味なくそれを引き立てている。

街を歩けばそれなりに視線を集めるであろう事が容易に想像できた。事実、彼が入ってきた途端、眠そうに顔をしかめていたレジ店員の幾人かがさつと髪型を整えた。

しかし彼女たちの健気な努力も虚しく、男は気付く様子もないまま鼻歌交じりに買い物カゴを引っ掴むと、軽い足取りで惣菜コーナー

へと直進していった。

「さてはて、」

男はずらりと並んだお惣菜の列を斜め見て首を傾げた。

和・中・洋に別けて配置されたプラスチックトレーには、どれも割引を示す赤いシールが貼られている。

時間が経ってしまったそれらを少しでも無駄にしない為の最善策。どこのスーパーの食品売り場でも見かけられる有り触れた光景だった。

「へーえ、しっかしこんなに安くなっちまうもんなんだなあ」

それでもこういった場所に縁の無い男は、半ば呆れたような感嘆の声を漏らした。

男の名は、河野 豊。

こう見えても警視庁公安部四課に属する刑事の一人である。

河野の仕事態度は服装と同様決してまじめとは言えなかったが、彼自身は自らの仕事に遣り甲斐を抱き誇りを持って取り組んでいた。初めは外見だけで判断されてしまう事に憤慨を覚えることも多々あったが、今ではむしろこの外見があるからこそ一般市民（特に女性）の助力が得られるのだと強みに思うことにしている。

最もこんな身勝手な自負を同僚や上司に聞かれでもしたら、公安警察あるまじきと喝を入れられかねない。

いや、むしろ確実に入れられるだろう。

（松本さんあたりとか、あと課長は絶対言いそうだな。つつか斉藤さんは全然怖くないんすけど）

貫禄に満ちた年長の同僚に拳骨をお見舞いされ、そして堅物の女上司にばやかれる自分の姿が容易に想像できすぎて、河野は少しげん

なりとした。

「ったく。松本さんは大塚がちょっと褒めるからってデレデレするくせにさ。課長なんかすぐ酔っ払うし」

実のところ河野はたった今しがた、その上司である霧原美咲の誘いから逃れてきたばかりだった。

正確に言えば、一緒に飲んでいたもう一人の同僚に押し付けてきたともいえる。

「ま、課長と二人つきりになれるんだからむしろ感謝してほしいけどな」

同僚に対して芽生えかけた罪悪感を払拭するために、河野はわざと声に出して呟いた。

「でも明日になったらやっぱ何か言われるんだろうけど。……って、仕事のこと考えすぎだな」

やれやれと頭を振って、ちらついていた敵つい同僚の顔を脳裏から追い払った。

そしてもう一度だけ惣菜の海をぐるりと一瞥してから、

「今日くらい自分で作ってみるか」

気を変えて、その場から自主的に遠ざかった。

赴いたのは精肉や魚介類が売っている通路。

河野が惣菜売り場よりもさらに寄り付き難い空間である

「やっぱせつかく台所があるんだからさあ、たまには料理とかしな
いとなー」

新築のワンルームマンションには、最新式のシステムキッチンが設置されていた。

普段から滅多に料理などしなかった河野ではあったが、母親が引越しのお祝いにと送りつけてきたため、調理器具や基本の調味料など

は全て自宅に完備している。

「あ、そういや送られてきた中に鍋もあつたな……」

一人でつつくには丁度良い大きさのそれを見て、今ではこんなものもあるのかと感心したものだつた。

「確か戸棚の一番奥にしまつたよな」

もちろん一回たりとて使用したことはなかつた。

「鍋は……いいかもな」

灰色のそれを思い出した途端、急激に鍋物が食べたくなつた河野であつた。

「どれどれ……」

鍋をキーワードに色々と物色を重ねていく。

「オーソドックスなのはすき焼きとか、だよな。でもどうせなら鴨鍋……って、いきなりハードル高すぎか」

しばらくの間、口の中で復唱しながら商品を片っ端から手にとっていく。

「もつ鍋、かき鍋、いつそ鶏肉で出汁をとってきりたんぽ鍋……」

しかし自分で宣言しておきながら、河野の声はだんだんと自信を失くし小さくなっていく。

「料理なんて、精々カップラーメンにお湯を注ぐか、レンジで弁当を温めるくらいしかできないってのにな」

河野は今更ながら自分の発案した計画の無謀さに少々辟易していた。

うろつろと徘徊している間に刻々と時間が経過してしまつたらしい。あと10分で閉店することを告げるく螢の光の調べが河野の耳にこだましてきた。

「カゴの中はまだ空っぽだつつつのにな」

若干焦りだした河野は、いつそのこと買い物を放棄して外食してしまおうかとも考えた。

或いは手料理を食べさせてくれるような誰かを脳内で検索してみるも、該当するような顔はひとつたりとも浮かんではこなかった。

「最近仕事ばつかしてたからなあ……」

半ば言い訳のように呟いた河野の目に、

「お？」

ふと、魚介類コーナーで大きく宣伝されているそれが飛び込んできた。

「…… カニ、かあ」

見れば大きな蟹の足が何本も束になって陳列されている。

オープンしたばかりの頃は所狭しと並べられていたであろうそのシヨーケースも、今では残すところあと一つといったところだ。

随分な量が一括りになっているにも関わらずそれは破格の値段を付けられていた。

恐らくテレフォンショッピングでさえここまで叩き売れないであろう価格である。

「これは結構オトクかもな」

蟹鍋とはこれまた贅沢な一品を想像しつつ、河野は意気揚々とそれに手を伸ばした。

が、しかし

「あれ？」

ふいに重なった誰かの手の感触に、河野は視線をカニから外し上へと向ける。

「あ、どうも」

そこにいたのは一人の青年。

河野よりも幾つか若いかわいらしいに見えるその青年は、黒い短髪が艶やかに光る頭を少し傾げて気弱そうに笑っていた。

緑色のロングパーカーの下は白いシャツにジーンズと至ってシンプルな出で立ちだ。

それだけならば特に気にも留めることはないのだが、

「……」

河野が思わず目を奪われたのは、青年が抱える買い物の量だった。

青年はカゴではなくカート一杯に溢れんばかりの食材を詰め込んでいた。

「…… 凄い量っすね」

いつの間にか河野は無意識に口走っていた。

「いやあ、すみません」

少し顔を赤らめて照れる青年を呆れ見ながら、河野は自らの手をスツとどけた。

「カニ、買っんでしょ？」

「え？でもいいんですか、貴方だって……」

「どうせ俺が買ってもまともなモノなんて作れないんですから、いいんすよ」

「っ、ありがとうございます！」

満面の笑みで頭を下げながら、青年はクリスマスプレゼントを開ける子供のような表情でそれを既に容量オーバーになりかけているカートの中へと追加した。

「…… 何だかなあ」

そしてそんな青年の後姿を、河野はぼんやりと見守った。

いつの間にか自分の口元に笑みが浮かんでいた事に彼は気付いてい

なかった。

*

結局。

河野は鍋を諦め、カツ丼とカップ麺を幾つか買って店を後にした。

「これなら別に近所のコンビニ行っただろうが早かったっつーの」

悪態を吐きながらも、河野は面白いものが見れたと内心ほくそ笑んでいた。

「あれだけの量、あの人だけで全部食べるのかなあ」

しかし並大抵の量ではなかったことを思い出し、きっと恋人でもいるのだろうと勝手に納得してみた。

と、そこへ。

「あ。」

例の青年が重そうな買い物袋を幾つも提げてやってきた。

片手に少なくとも3つずつ持ちつつも、腕の中にさらなる紙袋を抱えた青年はよろよると見ているほうが心配になる足取りで河野と同

じ方向へと歩いてくる。

途中で彼がよろける度に紙袋の中のみかんがころころと転がり落ちた。

それを拾おうと青年が屈む度に次から次へと色々な物が零れ落ち、傍から見ればコメディ―歌劇のようだった。

「…… んだあー、もうっ！」

とてもではないけれど見てはいられなかった。

思い立つが早い、河野はつかつかと青年に近づくとずいっと手を差し出した。

その手を視界に収めた青年の顔がゆっくりと河野を見上げる。

「ほらっ」

ぽかんと口を開けたままの青年に河野は声をかける。

「途中までだけど手伝いますよ。だからそれ貸してください」

「あ、貴方はさっきの……。でも、」

「心配しなくても途中までですよ。ほら、これもなんかの縁ですって」

しばらくぼうつとその手を見つめていた青年だったが、

「すみません、じゃあ、あのお願ひします……」

と、買い物袋を手渡した。

「へえ、李さんは留学生さんなんですか」

青年の買い物袋を幾つか手に取った河野は関心したように呟いた。

名前も知らないままでというのも何かと不自然だったので、二人はお互いに簡単な自己紹介を試みせた。

もちろん河野は自身が公安警察である事実まで話したわけではなか

った。

警察という職業は何かと他人の警戒心を煽る職業であるからだ。

「それにしても日本語が上手ですよ」

「いやあ、それほどでもないですよ」

お恥かしいと照れくさそうに笑った青年、こと李^リ 瞬生^{シエンシュン}はその弾みで再びみかんを歩道に転がした。

慌てて追いかけるその様を河野は苦笑を交えて見つめていた。

「日本はどうすか？やっぱ故郷が恋しくなったりするもんなんですかね？」

みかん拾いから舞い戻ってきた李に河野は尋ねる。

「日本はいいところですよ。ご飯が美味しいですし、皆さん優しくしてくれますし。何より安全ですしね」

「そうですね。昔はそれなりに安全だったみたいですけど、今はそうでもないですよ」

屈託の無い笑顔で答えた李に対し、河野は少し警戒を促す。

「東京なんか特にそうですね。ゲートができてからは、ほら、何か変な連中も現れたって噂ですし」

「ケイヤクシャ、でしたっけ？」

「っ！」

李の口から思わず出たその単語に、河野は危うく買い物袋を落としそうになる。

「け、契約者って、それ李さん一体」

「ああ。バイト先で聞いたんですよ。超能力者みたい人たちがいるんだってそんな噂。…… 河野さん？」

明らかに顔色の悪い河野を李が怪訝そうな表情で覗き込んだ。

「どうか、しましたか？」

「あいやいやこつちの話。所詮はそれ噂っすから過信は絶対ご用心
って感じっすよ」

「…… やっぱり日本語は難しいですね」

呪文のようにリズムカルに告げられた言葉に、李は目を白黒させる。
「李さんは中国に家族とかいるんですか？」

多少気まずくなった空気が脱出するために河野は無難なトピック
を話題に上げる。

それが青年の顔を曇らせるとも知らずに。

「……」

「…… 李、さん？」

今度は河野が怪訝な顔をする番だった。

はっと気付いたような表情で我に返り、李は一拍だけ間を置いてから

「家族は—— 今は、いません」

そう、ポツリと呟いた。

それを耳にした河野が心の底から慌てふためいた事は説明するまで
もない。

（やっべ、何か墓穴掘った！）

何を思ったのか、河野はとっさに深々と頭を下げた。

買い物袋がガサガサと派手な音を立ててぶつかり合うその様子を、
李はキョトンと見つめていた。

「あ、あの李さん、俺なんかマズイ事聞いちゃって、そのすいませ
ん！」

「いえいえ。もう昔のことですから」

こちらこそすみませんと頭を下げた李の懷から再びみかんが幾つか
ころころと転がっていく。

拾おうと手を伸ばした李と河野の頭が鈍い音と共に見事激突し、お
互い目尻に涙を滲ませながらも顔を見合わせて笑った。

「あの、マジですいませんでした。俺そついうところの配慮がいま

ひとつ欠けてるみたいだつて、上司からも言われたばっかなんすよ……」

「ほんとうにもう大丈夫ですから。日本に来てから優しくしてもらってばかりですし」

「はぁ……」

薄く微笑んだまま隣を歩く青年の顔を盗み見て、河野は少しだけ違和感を覚えた。

(…… 何だこれ?)

胸の中に残ったわだかまりは、結局最後まで消えることはなかった。

それから他愛もない話を続けていると、唐突に分かれ道が現れた。

あまり流行っていないさそうな中華飯店。

道路を挟んでその向かい側に存在している児童公園。

その一歩手前の分岐路で河野は左を、李は直進する方向を選択した。

「マジでこれ全部持って帰れるんですか？」

それまで持っていた買い物袋の九割を李へと返却し、河野は心配そうに尋ねた。

「もしアレだったら家まで持って行きますよ。別に用事もないですし」

「大丈夫ですよ。ここから近いですから」

笑ってそれを受け取りながら、李は丁重にお辞儀をする。

「本当に助かりました。河野さん、ありがとうございます」

「いや別に大したことじゃないっすよ」

河野は頭の後ろで手を組みながら、今更ながら目の前の青年の顔をじつと眺めていた。

食い入るよう見つめられて李はその笑顔を若干引きつらせる。

「え、えつと……河野さん？」

「あーなんか違和感っていうか疑問っていうかアレなんですけど」

「……また呪文ですか？」

早口でまくし立てる河野に今度は苦笑を漏らしながら、李が受け答える。

しかし河野の顔はいたって真面目そのものだった。

普段の彼を見たことが無い李は知る由もなかったけれど、河野がまったくの茶化しもせず物事を見たり考えたりするのは、滅多にないことなのだ。

「あのさ、李さん」

その表情を崩さないまま、河野は語りかける。

「無理に——笑わなくても、いいんすよ？」

「っ」

先ほどとは違った意味ではつとした李の顔から、見る見るうちに笑顔が削げて行く。

まるでそれが本来の彼であるかのように。

何を考えているのかすら分からないその瞳は柔らかい笑顔と同様、またはそれ以上にしっくりくるような気がすると河野は思った。

「別にそんな顔をさせたかったわけでもないんですけどね」

「……」
へらりと笑った河野を、李は無表情で眺めていた。
何かを見計らうように。人との距離を推し量るように。
「さつきさ、李さんが言ってた“ケイヤクシャ”なんすけど」
それを悟ったのか、河野はまるで独り言のように口走る。
「そいつら、実はホントにいるみたいなんですよ」
「……」

河野はほんの一瞬だけ身を硬くした李には気付いていない。
その右手が買い物袋の陰で使い慣れたナイフの柄を握り締めていた
事も。

気付いていないからこそ、河野は先を続ける。

「まあどうして知ってるかってのはここじゃ言えないんですけど、
どうやらそいつらには感情がないって話らしいんすよ」

「…… だから俺にも感情が無い、と」

「いやいや！だってまさか李さんが契約者でもあるまいし！」

冷たく言い放たれた李の言葉に河野は両手を振って全力否定してみ
せる。

「そうじゃなくて、あーっとその俺が言いたいのですね……」

頭をフル回転して考える河野の脳裏に、少し前に出会った契約者の
男の姿が甦ってくる。

エージェント
契約者としてM I 6に所属するあの男。

白いスーツに金髪が良く映える、控えめに言っただけの伊達男。
彼の仲間である長身の派手な黒人女性を含めて、彼らは河野が初め
て出会い言葉を交わした契約者たちだった。

正直に言って、彼らは河野が想像していた契約者像とはかけ離れて
いる存在だった。

よく喋り、よく笑い、時々怒りや不満の感情すら垣間見せた。

しかしそのジェスチャーの全てから虚偽の匂いが漂っていた事を河野は感じていた。

虚偽というよりも、それは演技。

うまく繕われた仮初の表情や言葉の羅列。

「えーっと、多分俺が言いたいのですね……」

しばらく記憶の波間で唸り悩んでいた河野は、やっと口を開いた。

「もし李さんが辛かったり悲しかったり、そんなときは多分笑って誤魔化したりしなくてもいいんですよ」

「……？」

「あ、あのえっとだから！無表情でもいいってことですよ多分っ！」

無表情でも。

感情がうまく掴めなくても。

「自分の感情を偽ってまで上手に笑わなくてもいいと思うんですよ」

「……」

河野の言葉を呑み砕くように聞きながら、李は無言を通し続けた。

「李さんが優しさとかで他人に心配かけないように笑ってるなら、それもいいですけど。でも俺は別に笑って無くても、いいと………思いますよ………」

やはり何も言い返さない李に段々と語尾が萎縮していく。

（やっぱり変な事だったかな、俺……）

「……」

少しだけ後悔した河野は、せめてこのままカッコよく立ち去ろうと最終的に逃げる事を選択した。

くるりと体を反転させて李とは反対の方向へと歩き始める。
胸の中にもやもやとした想いを抱えながら。

「…… あんたは、」

と、その背中に声がかかる。

思わず勢い良く振り返った河野がいた位置からは、街頭の光が逆光となつてその表情は伺えなかった。
しかし声だけはちゃんと聞こえた。
ちゃんと耳に届いていた。

「あんたは、契約者に感情は無いと、本気で思ってるのか？」

「…… そうつすねえ」

唐突に投げかけられた質問に河野はしばらく顔を上げてから、
「よく分からないですけど—— 眠ってるだけ、なんじゃないで
すかねえ」

そう答え、満足そうに笑った。

そしてそのまま再びくるりと背を向けると、一度だけ手を振って、
見る見る内に姿を消した。

別れの挨拶も無いままに。

残されたのは一人の契約者と無数の買い物袋。

照らし出すのは鈍く光る街頭。

聞こえてくるのは響く笑い声。

出所は近くのラーメン屋からだろう。

契約者の青年はそつと空を仰いだ。

白く輝く星が一筋、尾を帯びて流れていった。

幻想的な情景を、確かに潰えた誰かの生を青年は目に焼き付けて忘れないと密かに誓った。

その顔に浮かぶのは果たして感情の無い能面か微かに歪んだ微笑みか。

答えは冬の夜空の下、

氷解するように喪散した。

？・ <黒き獣が見る夢は遠い日の幻……>

「ヘルズゲート
天国門」

かつて、

「ヘルズゲート
地獄門」 と対を成すように南米で存在した、もう一つの領域。

今の東京のように封鎖されることはなく、そこは様々な組織による調査対象となり、各国が挙って契約者を投入し牽制しあつた。幾人もの契約者がそこで戦い、幾つもの星がそこで流された。

しかしその空間も既に無い。

5年前のある日、突如「天国門」が消失したその事件は今でも記憶に新しい。

それは、数多の命と広大な土地が失われた惨劇。

忌まわしき過去だけを残したその場所は、この地にありながら存在しない場所へと化していた。

一体何の為に戦うのだろう。

かつてその戦場の中でふと疑問を抱いた契約者が居た。

「彼女」の想いは後に小さな波紋となる。

凍り付いていた筈の水面に疑問は広がり、徐々に大きな波へとなっていく。

戦う事に疲弊しきっていた契約者達はいつしか失っていた感情を呼び起こし、そして変わっていく。

自分自身が生きるため。

契約者として在り続けるため。

そして、

—— 誰かを守る為に。

「彼女」の想いはずっと息衝いている。

途絶える事無く。

今も、そっと。

？ <黒き獣が見る夢は遠い日の幻……>

「……」

少年が一人、夜道を歩いていた。

夕日が沈み、紛い物の星が空を照らし出した夜道を、たった一人で歩いていた。

まだ小学生くらいだろうか。

赤茶色のハンチングの裾から覗く天然の金髪が、少年が異国の地からやってきたことを物語る。

そして極めつけは白いシャツに蝶ネクタイ、そしてサスペンダーベルトの組み合わせだろう。

まるでシャーロックホームズに出てくる登場人物を模したようなその格好は、色気のない公道で少年を嫌でも際立たせる。

「……」

少年は無言で足を止め、それまでの道のりを振り返る。

熱の籠らない目できよきよと辺りを見回し、そしてやっと小さく口を開くと

「ノーベンバー……」

誰かの名前を口にした。

*

それから数時間後。

とある児童公園で、少女が砂場にしゃがみ込み何かをしきりに撫でていた。

「美味しい？ヘルナンデス」

少女の足元の辺りから、かりかりとリズムカルな音がそれに答える。そこに居たのは一匹の黒猫。

涼しい音を響かせる鈴付きの首輪をしているあたり飼い猫であるように思えたが、どうやら少女の猫ではないらしい。

さしずめ愛想のよい飼いなされた野良猫といったところだろうか。少女が顎下を撫でると、ごろごろとくぐもった声で応対している。

突然、遠くの方から誰かの怒声が聞こえてきた。

「あ、いつけない！」

それに対し、少女は呼応するように立ち上がると、

「じゃあね！」

食事中の猫に一瞥をくれてから、勢いよく走り去った。

行き着く先は公園の向かいに在る中華飯店であることを、「猫」はよく知っていた。

「あの子もよく来るな。」

誰もいない公園で発せられた声。

出所はもちろん例の黒猫、である。

少女の姿が完全に見えなくなったことを確認し、猫は餌の置かれた皿から顔を上げた。

そして後ろ足でもむろに背中 of 辺りを掻いたあと、少し重そうな足取りで滑り台の階段を上り始める。

「…… 最近、ちよつと太りすぎたか」

頂上まで辿り着くのに息を切らしていた黒猫は、眉根をひそめた。自身の身体を見回し嘆いたその様はあまりにも猫とはかけ離れている。

そもそも、会話が出来る時点で既に「普通の猫」だと言い難いのだが。

彼の名は「猫」。

中国語でそのままネコという意味である。

彼はただの猫ではない。

むしろ本来の彼は「猫」でなく「人」、それも「契約者」であった。＜動物を対象とした憑依＞を能力として授かった彼は、しかしあるとき戻るべき自分の肉体を失ってしまったのだ。

しかたがなくその時点で憑依させていた猫の身体を拠所として使用するようになり、同時期に自分の名前も捨てた。

体が無ければ名前だけを記号として持つていても滑稽だと彼の契約者の観念が合理的に判断したからである。

特殊な体となってしまうた彼は自らを存続させていく為、組織に隷属していく道を選んだ。

そして現在に至る、というわけである。

猫^{マオ}は、決して今の生活が嫌いではなかった。

任務が無い時は日長一日ゆっくりと日向ぼっこをしていられた。

これが人の姿であったなら白い目で見られたかもしれないが、猫の体を持つ今となっては逆に微笑ましく眺めてもらえる。

そして多少なりとも愛想よくしておけば飯に困る事もない。

ただ、猫の体を持つ以上その脳には情報処理限界が存在する。

時々そんな猫の本能が人の理性を勝つてとんでもない行動をしでかしてしまうため、脳は常に組織が管轄するデータベースでバックアップを行わなければいけないという不便さはある。

しかしそれ以外にこれといって困る事も見当たらない。

勘違いした人間から謂れの無い迫害を受けることを例外としたら、むしろ人であったときよりも快適な暮らしをしているようにも思えた。

それでも。

ふと、不安になるときがある。

「……」

そんなとき、彼は決まってこの場所に上り、そして空を見上げた。本当はもっと高いところから見上げれば幾分か星も近くに見えただろう。

しかし彼にとって高さはあまり問題ではなかった。

「ああ。」

猫は満たされたような溜息を吐いた。

「空はいつも変わらないな。」

あの時からずっと、と猫の舌で付け足した。

あの時。

まだ「天国戦争」が活発化していた頃。

大地が多くの契約者の血を含み、幾多の星が流れていた時代。

彼はまだ猫ではなく人の形を保っていた。

しかしどう形が変わろうと、彼が一人の「契約者」である事実は揺

るぐことはない。

人の目で視た戦場も猫の瞳で観た戦場も差して変わることはなかった。

命と命の奪い合い。

各国の思惑が張り巡らされたフィールドでの合理的な駆け引き。

騙し、騙され、騙し合い、そして最後まで騙しきった者が勝利する。そんな過酷な状況でも特に不平不満を抱く事無く幾人も契約者が散っていった。

彼もまた同じ想いだった。

負けたのは己が弱さ故に。

強い者が勝ち続けていく事実を必須と認識し、彼は今まで生き抜いてきた。

死んだのは己が儚さ故に。

感情も感傷も交えずにただ殺していく現状を、彼は迷わず進み続けてきた。

けれど。

人としての体を失った今、

彼が最も恐れていたのは —— 人としての感情まで失ってしまう事だった。

それが今は、堪らなく怖い。

恐怖など、感情などとうに捨て去った筈だったのに。

こうして喪失に怯え縊るように星を見ている自分がいる。

正確に言えば、彼が見ていたのは「自分の星」だった。

いつだったか誰かに教えてもらった事があった。
その白く小さな星を見つけるたびにほっと安堵に心を休め、見つけれない日は不安で胸を揺るがせた。

けれどその一喜一憂さえも今の彼にとっては嬉しかった。
それがまだ心がそこにあるしとなったから――

「……そういえば。」

頭上で燦然と輝く星々を見つめながら、猫ネコはふと思い出す。

「アイツを初めて見かけた日も、こんな風に星を見上げていたっけな。」

それは「天国門」ヘブンズゲート内での事。

組織の噂で聞いていた <黒の死神> と対面したあの日。

その青年もまた、一心に星を見上げていた。

何かに許しを請うように。

祈り、願うように。

ただ真っ直ぐに空を仰いでいた。

その様子があまりにも聞いていた話とは違っていたので、人であった頃の彼は思わずその姿に見とれてしまったのを憶えている。

すぐに気付かれ警戒するように立ち去ってしまった青年の顔は、なかなか忘れる事はできなかった。

「あの頃は線も細くて、まだ子供という感じは否めなかったな。」

その青年と再会し、あまつさえ一緒のチームを組むことになるうとは夢にも思わなかった。

第一、彼らが「天国戦争」を生き抜いた事実でさえ奇跡的なのだ。

「それに俺もまさか本体を失うとは思っていなかったし、な。」

そしてその青年がいつのまにか契約者として能力を開花させていることも想定外だった事の一つである。

「ま、アイツを見てると飽きないし」

星を見上げることに疲れれたのか、猫は満足そうに毛繕いをしながら楽しげに呟いた。

小さく熱い舌が毛皮を舐める度に首元の鈴がちりと鳴り響く。

と、

そこへ。

「……猫、」

思わぬところから声がして、猫は思わず動作をフリーズさせた。

固まってしまった首の筋をぎしぎし鳴らしながら、ゆっくりと声のした方を向いて見る。

(コイツ……)

いつの間に入ってきたのだろう。

寂しげに風が揺らしていたブランコの一角に、見慣れぬ少年がちょこんと腰掛け、その遊具を漕いでいた。

(いや、コイツは見たことがあるぞ……)

猫がその脳をフル回転させている間も、少年は無表情で虚空を小さく蹴っている。

その視線は未だに猫自身を捉えることはなかった。

(それにしても……)

一向に思い出せない猫は、しかし体中から噴出す汗を止められなかった。

(コイツ、どこからいた？どこまで聞いていた？)

色々と口に出して喋っていたところを見られていたとしたら、それは色々とマズイことになる。

ただでさえ子供はあまり得意でなかった猫ではあったが、ここは下手に逃げ出すよりも得策と、

「にゃ、にゃおーん」

滑り台をよろよろと降りきって、少年の元まで駆け寄った。

あくまでも人懐っこい野良猫を貫き通そうという作戦だった。

「……」

その姿をやつと視界に収めた少年はゆっくりと立ち上がると、やはり緩慢な動作でしゃがみ込み、猫と視線を合わせた。

(な、何だこの子ども)

内心焦りまくっていた猫ではあったが、そこは動じる事無く本物の

猫を演じきることにした。

だが、

(……?)

少年の瞳を正面から覗き込んで初めて、猫^{マオ}の心に違和感が生じた。

ガラス玉を詰め込んだような瞳。

これとよく似た、いやむしろまったく同じ瞳を彼は知っていた。

彼が行動を共にする盲目の少女、<ドール>である少女が同じ瞳を持っていた。

「…… お前、まさか。」

(……っ！)

気になるあまり思わず口に出してしまった猫^{マオ}は、慌てて前足で口を塞いだ。

その仕草が余計に猫らしからぬと気付いたときには既に遅かった。

「ぶにゃっ!」

少年は無言のまま、猫^{マオ}の胴を掴む形で抱きかかえ、歩き出した。
一体どこへ向かうのかと心の中で問いただしたとき、

(…… 思い出した!)

猫^{マオ}は少年があるM I 6の<契約者>^{干ジェント}と行動を共にしていたことを唐

突に思い出す。

しかし抗うことはしなかった。

下手に暴れると少年を傷つけてしまう事実には、何故か気が引けていたからだ。

「…… まったく。」

なんだかなあと人の言葉で喋ってみるも、少年は無言で歩き続けた。
(まさか仲間のところへ連れて行くつもりだろうか……)

いよいよ心配になってきていた猫ではあったが、しかし少年が、

「…… 帰れない。」

と呟いたので、とりあえず様子を見てみることにした。

「…… なんだかなあ。」

少年の腕に抱かれて見た星は、彼らを見下ろし微笑んでいるように見えた。

視線の端でそれらを捉えた黒猫は、

<黒の死神>が時折見せる小さな笑みを、そっと心の中で思い出し
ていた。

？・ <今まで得た物への 対価 と これから失うモノへの 代価>

ほの暗い夜道を照らすのは、

白みがかつた街頭と幾つもの星々。

それらがいくら偽物であろうとも、放つ輝きの美しさまで否定することは誰にもできない。

青年は両手に大量の買い物袋を下げつつも、ふと立ち止まって空を仰いだ。

以前とはまるで異なる空の情景。

一体誰が何の為に变えてしまわなければいけなかったのだろう。

その代償として多くのモノが失われしまった今も尚、答えは誰にも分らない。

青年は静かに問う。

手に得た能力の意味。

変貌を遂げた世界の在りかた。

そして —— 自分自身の存在意義を。

「……？」

ふとそこで正面から近づいてくる足音に青年は身を硬くした。

その両眼に光は無い。

ただひたすら黒より深い暗闇が底知れず広がっているだけだった。

今は、まだ。

？　＜今まで得た物への　対価　と　これから失うモノへの　代価＞

「やあ。」

光を欠いた向こう側から現れたのは、一人の西洋人。

歳は二十代後半から三十代前半。

透き通るような金髪と白いスーツ姿がいかにも紳士風な、柔らかな雰
囲気を纏った男であった。

青年はその位置から動かないまま男の動向を見つめている。

「別に怪しいものじゃないんだが」

苦笑を浮かべつつ怪しい者の常套句を呟いた男は、青年の手に握られている無数のビニール袋に視線を移し、ピューと一つ驚きの意を込めて口笛を吹いた。

「凄い量の買物だ。親切な私としては手伝ってあげたいんだが……」

金髪の男は同じく両手で抱えたビールの箱を掲げ、肩をすくめる。

「やれやれ。どうして私が飲みもしない酒など担いで帰らねばいけないのかね」

「……」

溜息交じりに吐き出された男の言葉に、

「…… お互い、大変ですね」

青年が返し、そして小さく微笑んで見せた。

「私は、ジャック・サイモン。イギリス外務省の者だ」

「僕は李 瞬生といいます。留学生です。えっと、よろしく」

何故か隣り合わせで歩いている二人。

ジャック・サイモンに至っては今まで進んできた道を引き返す形になっっている。

が、しかしどちらに向かって歩いていくかはさほど問題では無いと言わんばかりに、余裕たつぷりの足取りで李の横に張り付いている。

「えっと、サイモンさん？」

「まあ気軽にジャックと呼んでくれて構わないよ」

「えーつと……じゃあ、ジャックさん？」

「まあそれでもいいか」

抱えていたビールケースを持ち直し、ジャックはふと

「ああ。それとも“ノーベンバー１１”と呼ばれる方が正しいのかな？」

何の銜いもなくそう呟いた。

「はい？」

薄っすらと浮かべられていた李の笑顔がそのまま引きつって硬直した。

それを見てジャック・サイモンは至って真面目な顔でその理由を解説し始める。

「実はこう見えても私はとある組織のエージェントでね、まあそのとある組織というのも英国情報局なんだが、」

「…… はい？」

李の笑顔は既に困惑へと摩り替わっていた。

（…… こいつ、初めから“俺”だと気付いていたのか？）

何とか表向きは平常心を保っていたが、内心彼は非常に焦っていた。

そんなこととは露知れず、ジャック・サイモンことノーベンバー１１は淡々と語り続ける。

「実はこの日本にはある契約者絡みで滞在しているのだよ。ああ、契約者って知ってるかい？ゲートが生まれた時期と時を同じくして現れた異能者だよ。それでだね……」

「……」

李は終始無言を努めた。

その沈黙を、ジャック・サイモンは聞きいつているからだ勘違いしたようだ。

しかし実際のところ、李が驚きなどするはずもなかった。

何故なら＜彼＞は契約者、特にその固有の契約者について実によく知りえていたからである。

そう、隣に居るジャック・サイモンよりも――　　ずっと。

李　瞬生、もといコードネーム・黒はその瞳を研ぎ澄まさせる。

相手に気付かれないようにそつと右手に電流を走らせながら、ベルトに忍ばせたブレードへと伸ばす。

機会を伺うその様は、彼が＜黒の死神＞と呼ばれる所以を彷彿とさせる。

感情もなく駆け引きも無く、ただ悪意の無い殺意だけを用以て死を招く。

そして、

彼はゆっくりと手を引き上げて――

「……のは全て嘘だ。」

「……　はっ？」

突然、まったく唐突に発せられた突拍子もない発言に、黒は使い慣れたブレードの柄を思わず落としかけた。

「……　嘘、ですか？」

「そう。リアリティーのあるブラックジョークというやつだ。面白かったらどう？」

「……。」

はっはっはと声高らかに笑う西洋人の横で、李の体中に張り詰めていた緊張の糸がぶつりと千切れ、あまり爽快ではない虚脱感を味わ

った。

「ん？どうかしたかい？」

「あ、いや随分と設定がリアルだったもので、危うく信じちゃうところでしたよ……」

「そうかいそうかい！それは良かった」

何が良かったんだがまったく分からなかったが、とりあえず金髪の男は再度嬉しそうに笑って見せた。

（…… コイツ）

とりあえず今までの話は目の前の男が創り上げた盛大な嘘話という流れになってしまったので、＜黒の死神＞は再び仮の姿である李瞬生へ戻る事にした。

「ああ、そうだった」

ジャック・サイモンは、未だ歪んだ笑顔が拭えていない李に向き直ると

「実は私はある人を探していてね」
また唐突にそう告げた。

「人、ですか？」

「そう。まあ人といってもまだ子供なんだが」

少年の外見を丁寧に説明しつつ、ジャック・サイモンは首を傾げる。
「途中まではちゃんと付いてきていたのだが、いつの間にかいなくなっていてね」

「…… はあ。って、それって」
「ん？」

ふと李が指差した先に、

「あ。」

まさに件の少年が姿が現れた。

少年は彼らの様子に気付く事無く、ゆっくりと曲がり角を進んで行くところだった。

距離的には15m程あっただろうか。

「じゅ、ジュライ！おっと、」

叫んだ弾みでジャック・サイモンは思わずビールの箱を落としそうになる。

しかしその甲斐もあってか、少年はゆっくりと彼を振り返った。

そしてその瞳をほんの少しだけ見開いて、動きを完全に停止させる。

「…… まったく」

少年に駆け寄りながら、男はほつと安堵の溜息を吐いた。

「心配させるなど日頃からあれほど…… ってその腕に抱いているそれは何だ？」

見れば、少年の腕の中には大きな黒猫がしっかりと抱かれている。

固定されていない下半身をぶらぶらと揺らしながら、大きな黄色い瞳がジャック・サイモンの後ろに控えていた李の顔へと吸い寄せられる。

そんなことにはまるで気付いていないジャック・サイモンは、

「駄目だ駄目だ。動物なんて飼えないぞ」

と、帽子を被った少年に向けて言い放った。

「それに首輪がついてるじゃないか。どこかの飼い猫かもしれない」

「あ、それ僕の猫です」

「…… は？」

ジャック・サイモンが明らかに怪訝な表情をつくる。

しかし李は一瞥をくれると柔らかな笑みを浮かべたまま、至って真面目に頷いてみせる。

「それ、僕が飼ってる猫ですよ。 いやぁ奇遇ですね」

「…… 奇遇にも程があるだろう」

金髪に映える碧い眼を驚きで揺らしながら、ジャック・サイモンは呆れつつも呟いた。

しかしすぐさま立ち直ると、目の前の少年に向かって、

「まあそついうことだ。 ほらジュライ、その猫を離しなさい」

そう優しく促した。

が、

「……」

「さあ、どうしたというんだ？」

少年は黙ったまま俯いている。

帽子の鍰に隠されたその表情をうかがい知ることはできない。

ただその両手に抱えた猫はしっかり抱えたまま離そうとはしなかった。

「困りましたねえ」

然程困っている様子が見受けられない李に対し、黒猫が威嚇するような唸り声を返す。

「弱ったなぁ」

対してこちらは心底お手上げといわんばかりのジャック・サイモンは、途方にくれたような溜息を漏らした。

「元々、この子の面倒は私ではなくもう一人の連れが担当しているね。 私は正直、子供はあまり得意ではないのだよ」

「……でも彼はそうでもないみたいですけどね」

「ん？」

ふと衣服に違和感を感じたジャック・サイモンが視線を下にやると、ジュライと呼ばれた少年がスーツの裾をしつかりと握っていた。そして少年の熱の籠っていない両目がしっかりと李を見据える。それに伴い、李が少年と目線を合わせる為にしゃがみこむ。大量の買い物袋が地面に触れて耳障りな音を立てた。

少年と青年の視線がしばし交差する。
その様子を少年の保護者である男と、青年の飼い猫が静かに見守った。

「この猫……」

「はい。僕の猫です」

少年が薄い唇から紡いだ言葉を引きつぎ、李はにっこりと微笑んだ。

「……」

その笑顔に何を理解したのか、少年はひとつ頷くとゆっくりと猫を腕の中から解放した。

赤い首輪を付けた黒猫は飼い主を振り返ることも無く、一目散に暗闇へと消えていった。

しばらく猫が去って行った方向を見つけていた三人だったが、
「さてさて」

停滞した空気を払拭するように、ジャック・サイモンが声を発した。
「そろそろ我々もお暇するでしょうか」

腰元で洋服を掴んだまま離さないジュライ少年を気遣いつつ、英国紳士は李の方へと向き直る。

「色々と迷惑をかけてしまつてすまないな」

「いえ、僕は特に何もしていませんから」

よいしょと立ち上がりながら、李が首を振った。

その温和な視線がふとジャック・サイモンの足元へと向けられる。途端に黒髪の青年の両目が驚愕に見開かれ、そして口元から唐突に生まれた微笑みが徐々に顔中へと広がっていった。

「……それって長靴、ですか？」

「うん？あ、ああ」

嬉しそうでいて何処と無く寂しそうなその笑顔に言葉をなくしていたジャック・サイモンは、はっと我に返って足元を見た。

彼の両足には、スーツにはまるで似合わない緑色のゴム長靴が顔を覗かせている。

暗闇の中ではあまり目立たないそれを指さして、李が笑顔で問う。

「別に雨は降りそうじゃないですけど、今日」

「まあいわる、ジंकスみたいなものかな。いつかまた再会できるように」

「……へえ」

「これがどうかしたのかい？」

「いや、別に何でもないんです」

再びにつこりと微笑んだ李は少し後ろに下がってぺこりとお辞儀をした。

「じゃあ、僕はこっちですので」

「そうかい。では、我々はこちらから帰るとしよう」

視線で少年を促すと、李とは逆の方向へと足を向けた。

「また会えるといいな、李くん」

「ええ。そうですね」

互いに会釈をしつつ、二人と一人は違う道を歩き始めた。

別れは簡潔。

そこに寂しさの隙間はなく、悲しみが後を追うことはない。

しかし李　瞬生と呼ばれる青年はゆっくりと後ろを振り返った。
そして、心の底から呟く。

「―― もう、会わないといいですね」

感傷はなく、嫌悪もない。

たとえばそれが本心でなかったとしても、双方の利害としてはそれが一番良いであろうことを判断して。

見えなくなった二つの背中を見送って、彼は再び歩き出す。

そして二人の契約者が出会った偶然の邂逅は、こうして幕を閉じた。

＊

「しかし、どうしていなくなったりしたんだ？」

狭く薄暗いタクシーの中。

隣合わせで腰掛けた二つの影。

そのうちの大きなほうが、小さなシルエットに向かって尋ねている。
が、答えはいつまで待っても返ってこない。

「…… まあ期待していたわけではなかったがな」

ずっとひとつ溜息を吐いて、男は窓の外を通過していく華やかな夜景に目をやった。

李という名の青年と別れてから、ジャック・サイモンことノーベン
バileyレブンはとりあえずタクシーを拾った。

表情を滅多に変えない少年がどこをうろつき回っていたのか定かでは
なかったが、疲弊しているのは確かだった。

（無理もないか）

ドールとはいえ少年にだって休息が必要なのだ。
身体能力や基本的欲求は普通の人間と変わらない。
そう。

感情を失っているという点を除いては。

「……なあ、もしかして」

ふと思いついて、ノーベンバーは隣に座った少年に向き直った。

ドールという存在の定義として感情が著しく欠落しているということとは彼も理解していた。

しかし分かっているという尚、どこか信じきれない自分がいることも自覚している。

「もしかして、私があの子に言ってしまった事で腹を立てているのか？」

少年は、眠そうな視線だけをそっと男に向けた。

どうやら彼の言葉に耳を傾けてはいるらしい。

なのでノーベンバーも構わず先を続けることにした。

「“子供が苦手”だというのは本当だ。だがしかし、それはお前を苦手としているわけではなくてだな」

「……知ってるよ」

薄く開かれた唇から呟かれた言葉。

とうとう我慢できなくなったのか、少年はぐったりと目を閉じていた。

それを見たノーベンバーは少年が被っていた帽子を取り、その頭をくしゃりと撫でた。

「迷子になっていた間、怖い事はあったかい？」

少年は弱々しく首を振って見せる。

「じゃあ——楽しい事はあったかい？」

「……楽しい、こと？」

そこで少年の顔に初めて微かな変化が垣間見れた。

ほんの僅かではなかったが、それは困惑の色のようにも思えた。

しばらく考えてから少年は

「…… 分からない」

そう小さく答えた。

「そうか」

少年と同様、いささか眠気を感じ始めていた男はその返答に満足を覚えつつ腕を組んだ。

そして疲れた笑顔で思い返す。

「しかし変わった青年だった。また会えるといいんだが」

「きつと、会えるよ。」

「…… だといいな」

珍しくはつきりと言いつつ少年に驚きつつも、ノーベンバーは重くなっていく瞼を閉じた。

睡魔は思っていたよりも早く彼を浅い眠りへと誘った。

「会えるよ。」

安らかな寝息を立て始めた同乗者を横目で見ながら、少年が呟く。

「会いたい人に —— きつと、また会える」

そして男の柔らかい金髪に、そつと小さな手を置いた。

それはまるで幼子を愛しむような、優しさに満ち溢れた手つきだった。

＊

李瞬生

こと黒の名で知られる契約者は、暗い夜道を一人で歩いていた。

正確に言えば彼は“一人”ではなかったが。

「お前、一体どういふつもりだ」

振り返れば先ほど逃げた黒猫がすっかりと後をつけてきていた。その口から漏れるはずのない人の言葉に青年が驚く様子はない。

「どういふつもり、とは？」

それどころか冷静に應對している。

しかしその口調にさっきまでの柔らかさはなく、いささかぶっきらぼうで冷たい物言いだった。

そしてそれに呼応するかのように表情からも笑みが消えていた。

瞳に宿るは黒よりも黒い暗闇。

黒猫はその視線にひるむ事も無く、淡々と詰問していく。

「そりやお前、あのM I 6の契約者のことだろうが」

「あいつがどうかしたのか？」

「はぐらかすな、おい」

いぶかしむ様な猫の表情はまさに人そのものだ。

きつい言葉を投げかけるも、怒りを感じているというよりは呆れているというところだろうか。

「まさか感づかれたわけじゃないだろうな？」

「お前こそ、あの子供はどうした？」

「う……」

思い出したのか、猫の表情が陰った。

記憶を追い払うかのように頭を振ると、後ろ足でぱりぱりと耳の辺りを搔いてみせる。

「まあ、成り行きてやつだ」

「じゃあ俺もそういうことにしておこう。まさに成り行きだったんだがな」

一人と一匹の間にしばしの沈黙が流れる。

が、それも束の間

「なあ、猫^{マオ}」

足の裏を舐め始めた猫に黒が尋ねる。

その表情はいつもよりも穏やかで、それでいて何も読み取れないほど真っ白だった。

まるで白紙のように、何も無い。

そしてどこか虚ろな視線を空に向けたまま、黒は猫に問う

「俺達は、間違っているんだろうか？」

「…… 何だ急に、お前らしくもない」

猫は喉を鳴らし、目を細めた。

「＜黒の死神＞たるお前が、俺が間違っていると指摘したところで今更どうするといふんだ？」

「—— そうだな」

何気なく呟かれた返答が死神の胸に突き刺さる。

奪ってきたモノ。

手にかけて沢山の命。

この両手を過ぎていった数多の命。

そして偽りの空を流れた契約者の星々。

—— それらを経て自分が得たのは果たしてなんだったのだろうか

黒は自らを問いただす。

守りたかった者は失い、信じていた者には裏切られた。

それでもそれらを探し続けているのは滑稽ではないだろうか？

失っても、

裏切られても、

まだ何かを得たいと、誰かを信じたいと
自分はそう願っている ——

「お前も、変わった契約者だな」

いつの間か足元に近寄ってきていた猫が彼を見上げていた。

「お前はまた色々と捨て切れていないみたいだな——俺たち契約者が当に失ったはずのモノを」

「…… ああ。そうかもしれないな」

そこにいるのはもう虚ろな目をした契約者ではなかった。

「寄って行くか？ミルクぐらいならご馳走するぞ」

「そりゃあ有り難い。できればホットだと尚いいな」

「ああ。お安い御用だ」

一人と一匹は同じ速度で歩き始める。

最早そこに会話はなく、ただ歩調のみが重なっていく。

並んだ影は平行に長く伸び、彼ら自身が闇に紛れた時にどこかへと消え去った。

*

手に入れた物はいつか必ず失くすだろう
それは契約者だけのことでない
誰もに例外なくその時は訪れる

しかし

どれだけ絶望の奈落に突き落とされようと、
人は何か掛け替えの無いものを得ることができる

失って、また手に入れる
手に入れてはまた失って
どこかで新たな何かを得るのだろう

「生きていく」行為とはつまりその循環だ

その事実を、彼はまだ知らない

失ったと思っているものがまだそこに在ることも

そう

今は、
—— まだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1583/>

今日の出会いは、明日に続く別れの始まり

2010年10月12日05時42分発行